

## 資料7

研究課題	7 里山における半自然草原の生物多様性保全に関する研究 (23-25)
研究目的・背景	<p>里地里山の茅場や採草地など半自然草原群落の環境や特性、成立機構を明らかにするとともに、市民活動・研究活動を通じた行政機関への提案や、民間団体・地域住民が保全活動を展開できるよう、研究成果の情報提供など保全活動の支援を行うことにより、その生物多様性の保全を図る。当初、H23～27年度の研究期間であったが、H25年度末で担当者が転出、欠員となったため、H25年度までの研究成果をとりまとめた。</p>
研究結果	<p>(1) 里地里山調査      調査対象群落は、過去に火入れや刈取り、牧場または放牧地として管理が行われていた経緯がある。群落はススキ優占型とシバ優占型に分けられ、ススキ優占型群落はオオアブラススキとヤマハギを指標種として2種の群落 (Ms I型及びMs II型) に分けられ、シバ優占型群落は外来種であるハルガヤを指標種として2種の群落 (Zj I型及びZj II型) に分類された。すべての群落型間で相対積算優占度を用いた生活型組成は有意な差があり (<math>\chi^2</math>-test: <math>p &lt; 0.05</math>)、現在の管理等が影響していると考えられた。過去に記録されたススキ群落は、シバ優占型群落の出現種と一部共通しており、過去の管理条件から、この群落の成立には春季の火入れと周期の刈取り管理が重要であったと考えられた。また、調査対象群落における現在の管理方法では土壌の富栄養化や木本類の進入などが危惧されることから、今後の管理方法として群落型に応じて、刈取り頻度の増加や刈取った草木の搬出が必要であると考えられた。</p> <p>(2) ゴマシジミ生息地調査      i) H24年度調査結果      前年6月に全草刈取りを行い、当年6月に選択的に食草のみを残す刈取りを行う、一連の刈取り処理は、食草を被陰する群落上層の競合種ヨシなどを抑制し、光環境条件を改善させることから、ある程度有効な刈取り処理であると考えられた。</p> <p>ii) H25年度調査結果      保全刈取り区は保全対照区と比べて光環境条件は良好であり、食草の優占度やシュート数も対象区より大きな値を示した。ただし、花穂数は小さな値を示しており、刈取りによる攪乱の影響を受けたと考えられた。また、刈取りにより食草の競合種であるヨシの抑制についてもある程度の効果があると推察されたことから、ゴマシジミ生息地の保全のため、選択的に食草のみを残した6月の刈取り処理は有効であると考えられた。</p>
評価結果	<p>○総合評価 A(0人)・B(4人)・C(1人)・D(1人)      ○総合意見</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴマシジミの保全に有効と考えられる刈取りの提案など、成果をだし、情報提供など成果の普及も行っており評価できる。ただし、研究員の異動から研究推進が不可能になってしまったことから、評価をBとした。</li> <li>・一定の研究成果が認められるが、担当者の人事異動で研究が途中で終了したことは残念である。</li> <li>・研究員異動による研究途中の成果で当初の目標は未達と思われるが絶滅危惧種の保全には効果的と判断される成果があった。</li> <li>・重要な研究であり中断は大変残念である。</li> <li>・里地里山における半自然草原の植生・立地環境調査は、今後の地域環境保全活動のベースとなる研究であり、担当者転出、欠員による中断は、何とも残念なことである。一方、ゴマシジミなどの生息地調査とは研究の整合性、一体感という点で疑問を覚える。</li> <li>・重要な問題を扱っており、里地里山調査の部分は調査の設計が適切で短期間に良い成果を挙げている。「ゴマシジミ生息地調査」の部分は担当者の異動によりやむを得ない面もあると思うが、研究目標がこの課題本来のものなのかゴマシジミの保全なのかははっきりしない結果になっているので、整理すべきである。</li> </ul>
センターの対応方針	<p>① 完了 2 継続延期 3 新規課題化</p> <p>ゴマシジミ生息地調査により、希少種生息地における調査手法についても一定の成果が認められたことから、今回の研究成果を広くPRしながら、県内自治体の公園整備計画等への提案を行っていく。</p>